

草画帖



第九帖 四葉号



四葉の一枚が妖精のホルン。

鬼の児の四葉探して春暮るる

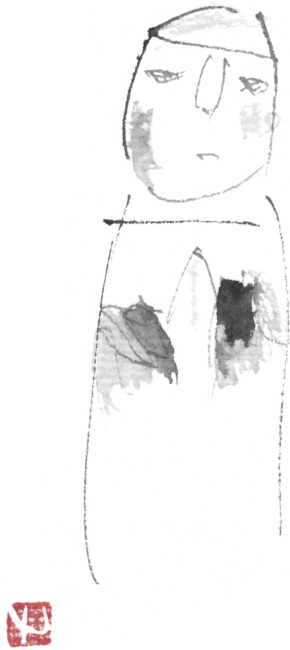


2018年3月30日。クローバーの花。
ボラーノの広場 しろつめくさの あかりはるか。



2019年3月31日。四葉筆。

杯葉を妖精のホルン、または天使の角笛と呼ぶ。極めて稀。



2019年4月23日。四葉筆。
花鳥風月、鳥獸虫魚、老若男女、春夏秋冬。



四つ葉スポットと巡り会ったのは4月28日、四つ葉の日。

四つ葉

四つ葉の

クローバーを摘んできて

水に浮かべる

バケツの中で

緑のおたまじゃくしは

生き物みたい

壁には

蛹が眠っている

リース型の

春への

タイムマシンだ

蛹は蝶になり

おたまじゃくしは蛙になる

では緑の

よつばじゃくしは何になる

棚の上の

迦陵頻伽が鳴くと

四枚の葉は

四枚の羽になり

緑の蝶か蜻蛉のように

幸運なひとのところに

飛んでいくのだろう

※ 迦陵頻伽：音座マリカ作の陶像



2018年11月6日。

珍しく二段に着いたクローバーの花を見た。



2018年7月19日。

四葉は奇形葉、異形葉。稀なるものの幸運。



2019年3月31日。七つ葉。

発生確率2億5000万分の1…というのはどのようなことか。



2019年4月27日。

四葉のクローバーで描く、四葉四笑羅。



2018年3月30日。クローバーの花。
「艸」という字。花のぼんぼりを着けて。

草話

クローバーとは昔から縁がある。ふうら陶像の杖に枯れた花が最適。他にマメグンバイナズナやヘラオオバコなどもよく使った。みんなその頃住んでいた犀川の河原の植物。ネジバナなども似合った。

杖は旅のアイテムであり、シンボル。ふうらがもつとも愛用したのがクローバー。但し、四つ葉の杖にしたものは一人もいなかった。

*

四つ葉のクローバーとの縁は老いてから。病後の書齋で古い菓子箱に入っていたカサカサの四つ葉を発見。その後の散歩で珍しい野鳥とともに一本、別の日には家人と二人で十八本と、それまでの生涯に手にした総数を軽く超えてしまった。

*

その年からクローバーの栽培を始め、一年中四つ葉を絶やさぬようになつた。今では四つ葉を手にするふうらも幾人かいる。

あまり幸運とも思えない、どちらかと言えば不遇な男が四つ葉のクローバーを育てている——我ながら珍妙なこととは思うが、もともと四つ葉も奇形変形、ここは老児の風狂として楽しんでいきたい。

ちなみにぼくの生まれた日の全米一位の曲はアート・ムーニー楽団の

《I'm looking over a four leaf clover》ひゃらららら。



六葉のクローバー

俳句 白山鳥翁 / 絵 艸々子 / 詩 泉井小太郎

草面帖 第9号 2019年4月28日 泉井小太郎編集 六角文庫発行
〒675-2312 兵庫県加西市北条町北条1039 Tel 0790-42-6008